

閉会の挨拶



吉田 竹也

(南山大学・副学長／人類学研究所・第二種研究所員)

吉田と申します。どうぞよろしく申し上げます。業務の関係で最初から出られず、失礼いたしました。

総合討論の場でクネヒト先生のお話を久しぶりに聞かせていただきました。私は実は南山大学出身でして、学生のころにクネヒト先生の授業を取っていました。パンフレットの中でクネヒト先生が書かれていらっしゃる、宗教を研究する立場というか……私は学生のときにクネヒト先生の授業を聞いていて、実は今初めて、クネヒト先生のパースペクティブと授業の内容が繋がった気がしています。

先ほどの総合討論の中でも、クネヒト先生は、文化相対主義と言うけれども、自文化中心なの人間なのではないかという趣旨のことをおっしゃっていたと私は受け取っています。私も実はそういう考え方です。文化相対主義は確かに理想的なのですが、みんな、やはり自文化中心主義なのだろうと思っています。

例えば、私はわりといろいろな本を読むのですが、アメリカのプラグマティストのリチャード・ローティが確か、「私は自文化中心主義の立場だ」というようなことを明言しています。たぶんそれも、先ほどのクネヒト先生のコメントに通じるものがあるのかなと思っていました。

本日は、人類学研究所のこれまでの歩みを振り返りつつ、未来に向けて、研究所が、そして人類学がどういう方向に行くべきなのかという、非常に大きなテーマであったかと思います。

私自身も人類学をやっていますが、非常に拡散しているのが現状だろうと思っております。そもそも人類学というのは人間を相手にするわけですが、これから世界の人口動態は非常に、地域によって拡大していくところと、縮小していくところと、いろいろまたいびつなことになっていくのかもしれない。そういう中で人類学というのは、本当に、この後、何世紀ももつのかというようなことも含めて、今後いろいろ検討していくことがあるように思っています。

副学長の立場というより人類学をやっている人間からのコメントになってきていることを今、反省しています。

本日、会場にいらっしゃった方々は、非常に細かいところから非常に大きな話まで、いろいろな論点を提示されていたと私は受け取っています。人類学研究所は、南山大学に3つある研究所の中で最初にできた研究所ですし、今後ますます発展していくことを、私も関わるべき一人としても願っております。本日のシンポジウムは成功裏に終わったかと思っております。本日はどうもありがとうございました。